

滋賀県道徳教材

# 近江の心



滋賀県教育委員会

## 刊行に寄せて

小学校では平成三十年度から、中学校では平成三十一年度から、「特別の教科 道徳」が全面実施となります。学習指導要領解説には、地域教材の開発や活用の重要性が示されており、滋賀県ならではの創意あふれる道徳教育の推進、優れた地域教材の開発が求められていると言えます。

滋賀県は、歴史上誇るべき偉人を多数輩出し、その教えは今日に至るまで脈々と受け継がれてきています。先人の優れた「近江の心」を受け継ぎ、地域社会に貢献できる子どもの育成に努めなければなりません。

この道徳教材「近江の心」は、「先人の『近江の心』を未来につなぐ」をテーマに作成しました。ここでいう『近江の心』とは、

中江藤樹先生の言葉である「良知」生まれながらにして持っている美しい心であり、

糸賀一雄先生の言葉である「この子らを世の光に」の考えにある一人ひとりを大切にする心であり、

雨森芳洲先生の言葉である「たがいに誠をもって交わろう」の考えにある異文化を理解する心であり、

近江商人の経営理念である「三方よし」の考えにある公の心であり、

琵琶湖とともに生き、自然を大切にしてきた近江人の環境を大切にすること

であります。

本教材集の作成にあたっては、『近江の心』作成会議」を設置し、教材を作成いただきました。本教材により各学校で児童の実態や教師の願いに応じた創意工夫ある道徳授業が展開され、子どもたちの郷土を愛する心や、豊かな道徳性が培われることを大いに期待しております。

平成二十九年三月

滋賀県教育委員会事務局 幼小中教育課長 西嶋 良年

目次

刊行に寄せて……………滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 課長 西嶋 良年

【読み物教材・指導略案・ワークシート】

○ 『馬方又左衛門』……………3

○ 『この子らを世の光に』……………7

○ 『雨森芳洲と真心のつきあい』……………11

○ 『受け継がれる思いく山中万吉く』……………15

○ 『生き物の宝庫・滋賀県』……………19

(巻末) ……関係施設一覧

滋賀県道徳教材「近江の心」(小学校版)作成委員

	氏名	所属・職
委員長	西川 敦子	東近江市立八日市北小学校 校長
委員	北沢 和也	滋賀大学教育学部附属小学校 教諭
〃	蜂屋 正雄	草津市立矢倉小学校 教諭
〃	坂東 靖記	栗東市立葉山東小学校 教諭
〃	保積 恵美	長浜市立湯田小学校 教諭
〃	山本 照代	竜王町立竜王小学校 主幹教諭

※委員は50音順に記載

表紙絵 田中 美穂 滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 指導主事

## 馬方又左衛門

時は江戸時代。琵琶湖の西岸、川原市（現在の高島市新旭町安井川）という宿場でのお話です。又左衛門は、この宿場で、馬にお客さんを乗せて運ぶ馬方の仕事をしている若者です。

ある日、又左衛門は、朝早くこの川原市から、榎木の宿（現在の大津市和邇）までお客さんを乗せていくことになりました。

「お客さんは、琵琶湖の方は初めてですか。」

「私の仕事は、飛脚ですから、こちらの方にも何度か来ていますよ。しかし、この琵琶湖は、いつ見ても大きくて美しいですな。」

こんな話をしながら、八里ばかり（約三〇キロメートル）南の榎木の宿まで、お客を送りました。そして又左衛門は、馬の首をなでながら、

「さあ、もう一度川原市までがんばろうや。」

と、声をかけ、来た道をもどっていきました。ようやく川原市の家までもどった又左衛門は、

「今日は一日中、よう歩いたな。ご苦労さんやった。疲れたやろう。」

と、馬にやさしく声をかけ、水を飲ませました。空は夕焼けで赤くなっていました。又左衛門が、馬の背中から鞍を下ろすと、なにやらどさっと重い包みが落ちてきました。

「あれ、何やこれは・・・?」

又左衛門は、その袋を拾いました。そして、袋の中を見ると

「わあ。」

と、大きな声を上げました。中には、たかさんの小判が入っていたのです。数えてみると・・・、



「わあ、二百両（現在の約二〜三千万円）もある。何でこんなところにお金があるんや・・・。あつ、さっきの飛脚さんか。なくしたらあかんとって、しまい忘れたんやな。きつとそうや。」

又左衛門は、急いで馬にえさを食べさせ休ませると、大切な小判の入っている袋をふるしきにしっかり包み、自分の体にくくりつけると、再び榎木の宿に向かって走り出したのでした。

赤い日はしずみ、あたりはすっかり暗くなっていました。しばらく走ると、又左衛門の足は、痛くなってきました。急いで出てきたので、おなかもすいてきました。足が思うように進みません。それでも又左衛門は、自分をはげまして走り続けました。

さて、榎木の宿では、飛脚が体をぶるぶるとぶるわせながら、宿屋の主人や、お客さんたちに泣きつくように言っています。

「お金がない。どこかで落としてしまったのか、いくらさがしても、お金の入った大事な袋がないのです。加賀のお殿様からあずかった大事な袋です。ああ、どうしよう。お金が出てこなければ、私は打ち首になる。私ばかりか、家族も重い罪になっちゃいます。」

宿屋の主人は、おどろいてたずねました。

「いったい、その袋には、いくら入っていたのですか。」

「二百両です。」

「えっ、二百両も！」

宿屋の主人も、まわりにはいた泊まり客たちも、こしがぬけるほどおどろきました。そして、みんなですみからすみまでさがしましたが、やはり見つかりません。

「ああ、もうこれまでだ。私の人生は終わりだ。ウウッ。」

どうとう、飛脚は泣き出しました。 「かわいそうだけど、そんな大金はもう返ってこないよ。」

みんな、気のどくそうに飛脚を見ながら言いました。

その時です。ハアー、ハアーと息をはずませながら、又左衛門が宿屋に飛び込んできました。そして、飛脚の顔を見ると大声でたずねました。

「飛脚さん、何か忘れ物をされませんでしたか。」

「お殿様からあずかった大事なお金をなくしてしまったのです。」  
又左衛門は、流れる汗もぬぐわず、体にくくりつけていた包みを大急ぎで開けて見せました。

「飛脚さん。これとちがいますか。家にもどって、馬の鞍をはずしていたら、その間から落ちてきたのです。」

「そ、それです！それです！」

と言うなり、飛脚はへなへなとすわりこんでしまいました。

「きつと飛脚さんのや、困っておられるやろうと思つて、大急ぎで来ました。どうぞ中身を確かめてください。」

飛脚は、ふるえる手で袋のお金を数えました。お金はきつちり二百両ありました。飛脚は、袋を手にし、涙を流しました。

「ありがとうございます。あなたは、私の命の恩人です。」  
飛脚は、何度も何度も、おじぎをしてお礼を言いました。まわりにはいた宿屋の主人やお客さんたちは、手をたたいて自分のことのように喜びました。

「飛脚さんに会えて、ほんとうによかった。会えなかつたらどうしようかと、心配しましたんや。・・・ああ、ほつとしました。これで安心して帰れます。それでは、これで。」

大金を渡した又左衛門は、帰ろうとしました。飛脚はあわてて、別の財布から十五両を取り出し、

「ちよつと待ってください。命の恩人には少ないのですが、お礼にこれをどうぞ受け取ってください。」  
と言いました。しかし、又左衛門は、

「お礼はいりません。」  
と、受け取ろうとしませんでした。



飛脚は、十五両を十両に、五両に、それでは一両だけでもと少なくしても、「いらぬ」と言うのです。まわりにお客たちが言いました。

「飛脚さんの気持ちだから、少しはもらってあげなさいよ。」

「それなら、今ごろは休んでいるところをここまで届けた駄賃に二百文（約五千元）いただきます。」

「たったの二百文かい。」

みんなは、又左衛門の言葉に、思わず声を上げました。又左衛門は、

「宿のご主人、すみませんが、私はこの二百文で、飛脚さんとそして心配してくださったみなさんと一緒にお酒が飲みたくなりました。どうぞこのお金でお酒とおつまみを用意してもらえませんか。」

「あんな遠くから届けてくださったのに、お礼もいらぬと言うのはどうですか。」

とたずねました。

「大変な忘れ物だったので、きつとお客さんが困っておられるだろうと心配して、急いできました。・・・ただ、私は尊敬している先生のところで、いつもいつもよい話を聞かせてもらっています。私だけでなく、たくさんの方が、先生から聞いたことを思い出して、正しいことを行うようにしています。」

と又左衛門は答えました。飛脚は、

「その先生というお方はどなたですか。」  
とたずねました。又左衛門は、

「川原市の近くの、小川村という所におられる、中江藤樹先生です。」

と答えました。

又左衛門の話の聞いていたみんなは、そんな立派な先生がおられることに驚きました。そして、その教えを勉強し、みんなが守っていることに心を打たれたのでした。

- (1) 主題名 誠実に生きる (A 正直, 誠実)
- (2) 本時のねらい 誠実に、明るい心で生活しようとする心情を育てる。
- (3) 本時の展開 (例)

	学習活動・主な発問	予想される児童の思い	教師の支援 (評価)
導入	1. 中江藤樹について知る。 2. 資料「馬方又左衛門」を読んで話し合う。 ○一日の仕事を終えた又左衛門はどんな気持ちでしょう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ やれやれ仕事が終わったぞ。</li> <li>・ 今日一日たくさん歩いたな。足が疲れたよ。</li> <li>・ ゆっくり休みたい。</li> <li>・ これでゆっくりにできるぞ。</li> <li>・ 大切な馬もゆっくりに休ませてもらおう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資料への導入とすするため、中江藤樹について説明する。</li> <li>・ 藤樹先生の教えを受けていた馬方の話であること</li> <li>・ 往復60kmの道のりがイメージできるよに、子どもたちに身近なたとえで説明する。</li> <li>・ 馬方は、お客がいなくても馬には乗らず歩くことを説明する。</li> <li>・ グループ討議を取り入れて、多様な考えにふれられるようにする。</li> </ul>
展開	○ 榎木の宿へ向かって走りながら又左衛門はどんなことを思っていたでしょう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 足が痛い。走るのがつらいな。</li> <li>・ おなかがいすいてきた。</li> <li>・ すっかり夜になってしまった。今頃本当はゆっくりにしているはずなのに。</li> <li>・ こんな大金を無くして、今頃あのお客さんはどんなに心配しているだろう。</li> <li>・ 早く届けてあげたい。</li> <li>・ 飛脚さんが喜んでくれただけで届けたかいたが。</li> <li>・ 当たり前のことをしていただけなのに、お礼なんて受け取れない。</li> <li>・ 藤樹先生に教わっているような生き方がしたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 又左衛門の気持ちにじっくり浸れるようにワークシートを用意する。(誠実に生きていきたいという又左衛門の気持ちに気づくことができたか。)</li> </ul>
展開後	3. 自分を振り返って話し合う。 正直に行動できたことはありますか。そのときどんな気持ちでしたか。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ドッジボールで当たったかどうか周りの人には見えにくい状況だったけれど、正直に当たったと言って外野に行った。すっきりした気持ちでした。</li> </ul>
終末	4. 「致良知」「五事を正す」について知る。		

(4) 評価

誠実に生きていきたいという又左衛門の気持ちに気づくことができたか。  
(発言・ワークシート)

(5) 板書計画

**「致良知」「五事を正す」**

**中江藤樹** 近江聖人

「どうしたら人として当たり前のことができるのか」塾を開き人々に教えた。

**馬方又左衛門**

**一日の仕事を終えたとき**

- ・ 疲れた。
- ・ ゆっくり休みたい。
- ・ 大切な馬もゆっくり休ませよう。

**榎木の宿に向かって走っているとき**

どんなに心配しているだろう。早く届けてあげたい。

**お金を受け取らない又左衛門**

- ・ 喜んでもらえただけでうれしい。
- ・ 当たり前のことをしただけ。
- ・ 藤樹先生の教えの通りにできてよかった。

ふりかえってみよう

**うそをついたりせず正直に行動する**

- ・ すっきりした気持ちになる。
- ・ 心が軽くなる。

ゆっくりに休みたい

足が痛い。お腹がいすいてきた。

参考

中江藤樹

江戸時代の初めのころの人で、9歳の時におじいさんとあついで、27歳の時に小川村に戻ってだれもが学べる塾を開きました。そして「どうしたら人として当たり前のことができるのか」を教え、目の前の人を心から大切にしたい人です。

<中江藤樹の教え>

致良知 (ちりようち)

「人はだれでも、生まれながらに美しい心(良知)を持っている。その心を汚さずに、鏡のようにきれいにしておくことが大切である。」ということです。中江藤樹は、「何を正すにも、良知に従い、行いを正しくすることが大事である。」と教えたのです。

五事を正す (ごじをただす)

良知に教える具体的な事柄として「顔つき・言葉づかい・目つき・藤樹先生・思い」をあげ、五事(貌・言・視・聴・思)を正すことが大切だと教えました。すなわち、なごやかな顔つきをし、思いやりのある言葉づかいをし、澄んだ目でものこを正すこと、相手の本当の気持ちを見極めようとし、思いやりのある気持ちを持つて生活することによって「良知に教える」ことができるのです。

出典 「藤樹先生」高島市教育委員会 「馬方又左衛門」NPO 法人高島藤樹会

# 馬方又左衛門

名前 ( )

お礼のお金を受け取らない又左衛門は、  
どんなことを考えていたのでしょうか。



A large, cloud-shaped thought bubble containing five horizontal lines for writing.

## この子らを世の光に

一九四五年八月

十五日、滋賀県職員である糸賀一雄は、病床で敗戦の日を迎えました。

戦争によって住む家や家族をなくした子どもたちは頼る者もなく、食べるものも眠るどころもない状態で、繁華街や駅前などにたむろしていました。

しかし、終戦後の日本では、だれもが自分の生活に精一杯で、そうした子どもたちに手を差し伸べる余裕はありませんでした。また、障がいのある子どもたちへの支援は、さらに後回しにされていました。

このような中、糸賀は、

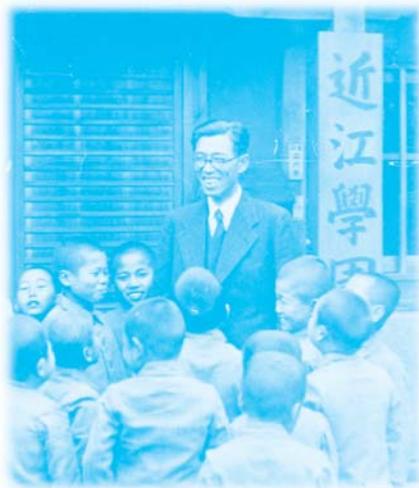
「この子たちを、社会のすみ追いやって、不幸な人生を送らせてはいけません。むしろ、この子たちこそ、みんなで大切にして、この世の光にしなければいけない。」

という思いをもちました。また、

「この子たちを、教育の立場でしっかりと受け止めなければならぬ。そのことを通して、新しい社会、教育の姿を未来につくりあげたい。」

と立ち上がったのです。

糸賀は、仲間たちと新しい教育の姿について何度も話し合いました。そして、『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみではなく、この子らの存在そのものが世を



糸賀一雄と子どもたち  
(糸賀一雄財団提供)

明るくする光であるから、『この子らを世の光に』しようという考えにいたったのです。

しかし、その思いの実現には、大きなかべがありました。第一のかべは、障がいのある人への、大人たちの意識を変えることでした。第二のかべは、障がいのある人たちが、生き生きと学び生活する施設をつくることで、これには多くの資金が必要でした。

糸賀は、「施設設立への思いを「趣意書」にまとめ、友人、知人を訪ね歩いて説明しながら意見を聞いたり、県に説明して協力をはたらきかけたり、募金活動を行ったりしました。

趣意書には、「彼らをやりわらわしたたちの仲間として温かく育て上げ、正しく教育すればそれがまた同時に社会の健全な発展を少しでも助けることになる。」と書かれています。趣意書にこめられた糸賀の思いは、多くの人々の心を動かし、施設づくりの資金も集まり始めました。

こうした努力のおかげで、戦争で家族を亡くした子どもたちと障がいのある子どもたちが共に学ぶ施設、『近江学園』が昭和二十一年十一月十五日、大津市南郷に誕生しました。

しかし、開園当初は様々な困難がありました。その一つが、食糧確保です。当時は、国中が食糧難の時代でした。



学園では、毎日のように知り合いを訪ね、何とかその日の食糧を確保するという状況でした。

こうした苦労が続く中、糸賀の知り合いが、自宅の米びつを空にしてまで、学園にお米を持って来てくれました。

また、別の日には、地元南郷の青年会の役員が、突然学園を訪れました。なんと、リヤカー二台分の野菜や豆などを運んで来てくれたのです。

「ほんの気持ちだけだけど、受け取ってください。」

青年たちは、この学園を何とか応援したいと思い、町内会の家々から野菜を集めて、運んで来てくれたのです。さらに、

「もし学園がいそがしいようでしたら、洗濯などをお手伝いします。」

とも申し出てくれました。

糸賀は、こうした支援者一人ひとりに、満面の笑顔で気持ちを伝えました。

このように、多くの人々の支えによって、近江学園は困難な時代を乗り越えることができたのです。

近江学園は、昭和四十六年に、現在の湖南市に移りました。

創立当初から今も変わらぬ取り組みの一つに、生産教育があります。これは、子どもたちに、社会生活において大切になる知識と技術を身に付けさせると同時に、寄付など



だけに頼ることなく、生産により自立的な学園運営を志すものでした。作業科の子どもたちは、木工や窯業など、様々な製品づくりの技術を身に付けています。

地域のおまつりの様子  
(近江学園提供)

また、近江学園では、自分たちがかつぐおみこしを作って地域のおまつりへ参加することが、毎年の恒例行事となっています。子どもたちは、地域の人たちに歓迎され、一緒になっておまつりを楽しんでいます。

このように、障がいのある人とそうでない人が支え合って生きていく社会をつくりたいと願った糸賀の思いは、今も大切に受け継がれているのです。

病床：病院や診療所などに設けられた、病人のベッドのこと。  
趣意書：ものごとを行うにあたって、自分の意見や目的などを記したものを。

窯業：陶磁器・ガラス・セメント・れんがなどを製造する工業。

生産教育：ものづくり（木工・窯業）を土台とした仕事につくための訓練。

(1) 主題名 一人ひとりがかがやく世の中に〈B 親切・思いやり〉

(2) 本時のねらい… 糸賀一雄の生き方から学び、誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする態度を育てる。

(3) 本時の展開 (例)

	学習活動と主な発問	予想される児童の思い	教師の支援 (評価)
導入	1. 糸賀一雄、近江学園について説明する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>テレビで特集を見たことがある。</li> <li>聞いたことはあるがくわしくは知らない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人物、施設について説明し、資料への方向付けをする。</li> </ul>
展開前段	2. 『この子らを世の光に』を読んで話し合う。 ○糸賀さんは、どのような思いで「この子らを世の光に」という言葉を使ったのだろう。 ◎地域の方々に満面の笑みで応える糸賀さんの思いを考えよう。 ○地域の人たちの声援を受けておみこしをかつぐ子どもたちの様子を、糸賀さんはどのように感じているだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>あわれみの目で見るのは、失礼なことだ。</li> <li>この世のだれもが、光り輝く存在なのだ。</li> <li>大変ありがたいことだ。</li> <li>我々の思いをわかってもらえた。</li> <li>応援の気持ちがうれしい。</li> <li>本当によかった。</li> <li>みんな笑顔で幸せそうだ。</li> <li>この子らが認められる世の中になり、とてもうれしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>戦後の時代背景を補足説明したり、写真提示したりする。</li> <li>糸賀さんは、決して子どもたちを哀れんで行動を起こしたわけではないことをおさえる。</li> <li>食糧確保や人々の好意ももちろんだが、自分たちの思いが伝わったことを喜ぶ糸賀の思いに気付かせたい。</li> <li>糸賀さんが願った社会に近づいている喜びを想像させるとともに、社会をつくる一員としての今後の生き方を展開後段で考えられるようにする。(相手の立場に立って人を思いやることの大切さに気づくことができたか。)</li> </ul>
展開後段	3. 自分たちの生活について振り返る。 ○糸賀さんのように、思いやりの心で接し、行動することができているだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>電車に乗るときは、必ずお年寄りに席をゆずっている。</li> <li>相手の気持ちを考えて行動できるように気を付けている。</li> <li>まずは、学級の仲間に対して思いやりの心をもてるようにしたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>できていることは、遠慮なく発言できる雰囲気づくりに努める。</li> <li>できていることだけでなく、本時に学んだことで自分の生活を見つめ直した意見等も自由に話し合えるように留意する。</li> </ul>
終末	4. 教師の説話を聞く。		

(4) 評価・・・ 相手の立場に立って人を思いやることの大切さに気づくことができたか。

(5) 板書計画

(出典)

「この子らを世の光に～近江学園20年の願い」糸賀一雄

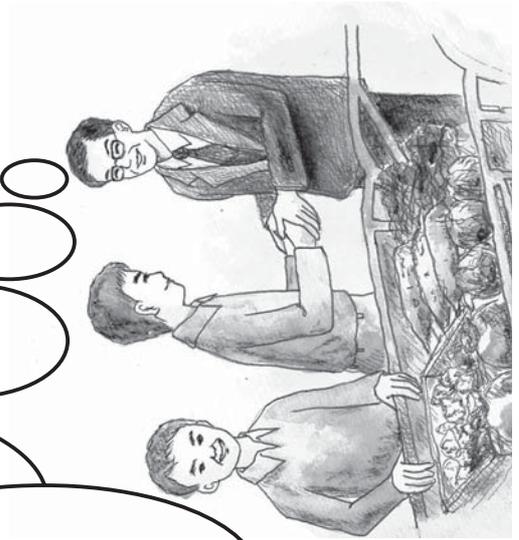
「みんなちがってみな同じ—社会福祉の礎を築いた人たち—」滋賀県社会福祉協議会

「伝えたい故郷の話～心の教育・郷土資料集～」湖南市教育委員会

# 『三の子らを世の光に』

名前 ( )

○地元の青年たちに満面の笑みで応える糸賀さんの思いを考えよう。



A large, cloud-shaped thought bubble containing five horizontal lines for writing.

○今日の学習で、どのようなことを学びましたか。

A rectangular box divided into three horizontal sections for writing.

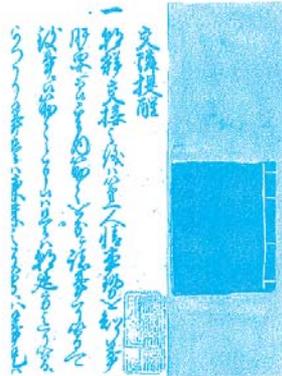
# 雨森芳洲と真心のつきあい



雨森芳洲

雨森芳洲は、八十八歳で亡くなるまで、若い弟子達に自分の学んできたことを教え、多くの書物を残しました。

その中には、とりの国と仲よくつきあうようによくわしく書いた『交隣提醒』があります。この本の中で、「外国と仲よくおつきあいをするには、おたがいに真心のおつきあいをしなければならぬ。」



『交隣提醒』

とあり、今でも外国とつきあうときの手本となっています。

芳洲の考えのもとにあったのは、「国と国とのつきあいには、おたがいの国の信頼が最も大切だ」ということです。その信頼を確かなものにするために、芳洲は、朝鮮の国の文化や歴史を学び、朝鮮語を学びました。当時、日本語と朝鮮語の両方を話すことができた学者は、芳洲ただ一人でした。

芳洲が四十四歳の時に、朝鮮の国から国王の使いである朝鮮通信使をむかえることになりました。対馬藩で、朝鮮

今から三百年以

上前の江戸時代に、近江国伊香郡雨森村（現在の長浜市高月町雨森）出身の雨森芳洲という学者が、日本と朝鮮の友好のために力をつくしました。

の国との貿易や外交という重要な仕事をしてきた芳洲が、案内や守りの役目を任せられることになりました。

芳洲は、朝鮮通信使として日本にやってきた人たちといっしょに、江戸（今の東京）をめざして長い旅をするようになりました。（滋賀県の中には「朝鮮人街道」と呼ばれる通信使が通った道が今でも残っています。野洲市から彦根市まで四十キロメートルほどの道です。）

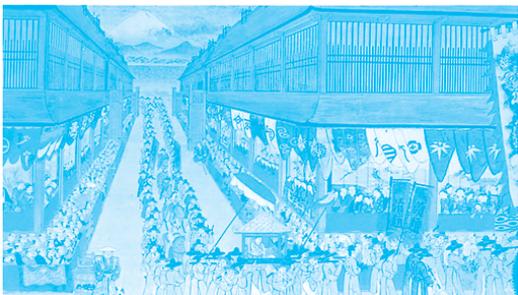
朝鮮と日本とは、言葉や風習など、ちがうことがたくさんあります。宿泊地の準備や料理の献立と材料の手配などを話し合っけて決めていきました。

朝鮮通信使を迎えることになった多くの人々は、「私は、朝鮮に行ったことがないので、朝鮮の人が何を食べているのか、わかりません。どうしたらいいでしょう。」

「とまっていたら、部屋を、どのようにしたらいいでしょうか。」

「床の間のかざりは、かけじくと季節の花でよろしいでしょうか。」

「いろいろと心をつくしてくだ



朝鮮通信使が通る様子



さり、ありがとうございます。みなさんが、朝鮮の人々のことを考え、日本での日々を気持ちよく過すごしてもらおうと思ったださるその気持ちは、きつと伝わりますよ。みなさんのその真心を大切にしてください。分らないことがあれば、何でも聞いてください。いっしょにがんばりましょう。」

と話し、人々の声を聞き、根気強く説明をしていきました。料理の準備だけでも、五か月という日数を必要としました。そして、とうとう朝鮮通信使の使節団が、芳洲たちの待つ対馬に到着しました。

芳洲は、朝鮮語で話をしながら、国と国の間に入って仕事をしました。何か月も前から準備をしてきた芳洲でしたが、朝鮮の人たちに気持ちよく旅をしてもらっているだろうかと、毎日、気を配りながらの長旅に、心が安まるときはありませんでした。

あるとき、日本人の一人が、

「あなたの国の国王は、庭に何を植えていますか。」と、通信使に聞きました。

「国王は、庭に麦を植えています。」と、答えました。

それを聞いた日本人は、

「何とふうがわりな、庭には花を植えたらいいのに。」

「朝鮮という国は、変わっているな。」

「庭で麦を育てても、花のようにには心がいやされないのでは。」

「日本では、四季折々の花おひかりを育てて、季節の移り変わりを楽しんでいきますよ。」

と笑いました。

すると通信使は、

「朝鮮は、農業を大切にする国です。国王は、農耕のうこうごよみ（いつごろ種をまくか、いつごろ収穫しゅうかくするかといった農家に必要

なことがわかるごよみ）を作って国民に示す大切なつとめがあります。もちろん、花も植えていたと思います。」と言ったそうです。

このやりとりを聞いていた芳洲は、「自分の国だけが正しいということはありません。朝鮮の国は、農業をとても大切にされていることがよく分かります。」

と話し、朝鮮の国の文化や風習など、私が伝えていかなくはいけないことがたくさんあると思いました。

通信使と幕府との間で、考え方のち

がいなどから、時にはうまくいかないこともありましたが、芳洲は、二つの国に長く続いてきている平和的な関係が続くように、日本の立場だけでなく、朝鮮の国の立場にも立つて考えるように心を配りました。

芳洲は、六十歳をすぎてからも、仕事や勉強のために、朝鮮に出かけました。そして、八十八歳でなくなるまで、朝鮮語や朝鮮の国のことを学ぶたくさんの人たちのために、多くの本を書きました。

芳洲が書いたたくさんの本は、今でも雨森芳洲庵あんの書庫しょこの中に大切に保存ほぞんされています。雨森芳洲庵には、韓国の中学生や高校生、一般の人たちが多く訪れおとす、当時の日本との関係をより深く知ろうとしています。また、多くの日本人たちもやってきて、芳洲の心を学ぼうとしています。

・床の間 ……日本間で座しきの一部を高くした場所。

・かけじく……絵や文字などをかいた紙を、上下にじくのついた台紙にはったもの。



## 道徳学習指導案

(1) 主題名 ちがいを認め、ちがいを大切にすること(国際理解、国際観賞)

(2) 本時のねらい

人種や国の違いをこえ、親愛の情を持って互いに温かい心で接したり、助け合ったりしようとする心性を育てる。

(3) 本時の展開

導入	学習活動・主な発問	予想される児童の思い	教師の支援(評価)
展開前段	<p>1. 雨森芳洲について知っていることを出し合う。</p> <p>○ 雨森芳洲について、知っていることはありますか。</p> <p>2. 資料『雨森芳洲と真心のつきあい』を読んで話し合う。</p> <p>○ 朝鮮通信使の人達をむかえる役目を任されたとき、芳洲はどんな気持ちだったでしょう。</p>	<p>・ 社会の教科書に出ていた。</p> <p>・ 江戸時代に朝鮮との交流に関わった人。</p> <p>・ 朝鮮通信使のお世話をした人。</p> <p>・ 滋賀県の人。</p> <p>・ 大変な役目だ。</p> <p>・ 自分につとまらざるうか。</p> <p>・ 通信使の人達が気持ちよく過ごしてもらえよう。</p> <p>・ 日本と朝鮮が仲よくできることをしていこう。</p>	<p>・ 自分たちが社会科で学習したことを想起させる。</p> <p>・ 地図や写真を提示する。</p> <p>・ 本時の学習の方向付けをする。</p> <p>・ 通信使の行列の図を見せ、大勢の人が関わっていたことを促させる。また、服装などの違いに目を向けさせたい。</p> <p>・ 二つの国のために力を尽くそうとする芳洲の心情に共感させる。</p>
展開前段	<p>○ 通信使を迎える準備をするために、人々に根気強く説明している芳洲は、どんなことを思っていたでしょう。</p>	<p>・ 初めて迎える人にとっては心配になる気持ちもよくわかる。</p> <p>・ 長い旅になるので、通信使の人達が気持ちよく過ごしてもらえよう。</p> <p>・ 迎える人たちの気持ちよく大切にしたい。</p> <p>・ 途中で投げ出したくなることはないだろうかと投げかけ、芳洲の心の中の葛藤を考えさせる。</p>	<p>・ 通信使を迎えるために、多くの日本人を東ねていく芳洲の立場を理解させる。</p> <p>・ 辛抱強く人々の声に耳を傾けている芳洲の姿に共感させる。</p> <p>・ 数ヶ月にもわたる話し合いで、途中で投げ出したくなることはないだろうかと投げかけ、芳洲の心の中の葛藤を考えさせる。</p>
展開前段	<p>◎ 通信使と日本人のやりとりを聞いて、芳洲は、どんなことを考えたでしょう。</p>	<p>・ もっと、日本の人たちに、朝鮮の人のことを理解してもらわなくては。</p> <p>・ それぞれの国には、それぞれの文化や習慣があることを、みんなに知ら</p>	<p>・ 日本と朝鮮の違いを示し、それぞれの国で大切にしていることを確認する。</p> <p>・ 自分の国だけが正しいのではなく、おたがいのよさについて考えさせる。</p>

展開後段	<p>3. これからの自分を考える。</p> <p>○ あなたが、外国の人と接していくとき、どんなことを大切にしていきたいですか。</p>	<p>・ いろいろな国の人たちと話せるようになりたい。</p> <p>・ 英語の勉強をもっとがんばりたい。</p> <p>・ 本を読んだり、ニュースや外国の資料を見たい。</p>	<p>・ 互いの国を思う芳洲の姿から、芳洲の願い「真心を持ってつきあう」大切さを感じ取らせたい。(相手の国のことを理解し交流することの大切さに気づくことができる。)</p>
終末	<p>4. 身近におられる外国の方に話を聞く。</p>	<p>・ ガストテイチャーの話をもとに今後の国際理解の素地作りへと繋ぐ。</p>	<p>・ 互いの国を思う芳洲の姿から、芳洲の願い「真心を持ってつきあう」大切さを感じ取らせたい。(相手の国のことを理解し交流することの大切さに気づくことができる。)</p>

### (4) 評価

・ 相手の国のことを理解し交流することの大切さに気づくことができたか。

### (5) 板書計画

**朝鮮**

- ・ お互いの国のことを知ることが大切だ。
- ・ 多くの人に伝えていこう。

**日本**

雨森芳洲と真心のつきあい

通信使を迎える役目について

- ・ 大変な役目だ。
- ・ 自分につとまらざるうか。
- ・ 日本と朝鮮のためにがんばって仕事をしよう。

**朝鮮**

通信使を迎える準備をしているとき

- ・ 初めて迎える人が心配になるのも分かる。
- ・ 朝鮮の国の習慣を知らないのだから、しかたない。
- ・ どちらの国の人にも気持ちよく過ごしてもらうためには、どうしたらいいだろう。

**日本**

通信使と日本人のやりとりを聞いて

- ・ 初め迎える人が心配になるのも分かる。
- ・ 朝鮮の国の習慣を知らないのだから、しかたない。
- ・ どちらの国の人にも気持ちよく過ごしてもらうためには、どうしたらいいだろう。

(出典)

『雨森芳洲先生—没後二五〇年記念特別展図録』対馬芳洲会編

『雨森芳洲』平井茂彦著

『高月の人物ものがたり—郷土史に残る人々』

滋賀県伊香郡高月町教育委員会編

雨森芳洲と真心のつきあい

名前 ( )

◆通信使と日本人のやりとりを聞いて、芳洲は、どんなことを考えたでしょう



雨森芳洲と真心のつきあい

名前 ( )

◆あなたが、外国の人と接していくときに、どんなことを大切にしていきたいですか。

◆今日の学習を振り返って（学んだこと・気づいたこと）

## 受け継がれる思い〜山中万吉〜

山中万吉は一六八五年、六人兄弟の末っ子として、現在の日野町に生まれました。万吉の家は、祖父から続く日野碗の塗師でしたが、兄の仕事がうまくいかず、住み慣れた家を手放すことになりました。この家には、庭のすみずみにまで、思い出がつまっています。

「一生けんめい働いて、きつとこの家を買いたいとして見せる。」万吉は、引越しの掃除をしながら、心の中でちかうのです。

万吉が二十歳の時に、大きなチャンスが訪れました。姉の嫁ぎ先から、「これをもって、行商に出てみたらどうや？」と、日野碗を大量にあずかることになったのです。

日野碗は古くから作られていましたが、江戸時代以後は、軽くて使いやすく改良され、関東地方の人々に喜ばれる品物でした。

当時の行商は、見知らぬ土地で商売をしながら、その土地の特産物や、必要としている商品の情報を集める、苦勞の多いものでした。荷物をかついだ万吉に、母親は、「体に気をつけや。無事に帰ってくるんやで。」

と、涙を浮かべながら声をかけました。万吉は母の姿に一礼すると、東に向かつて力強く歩き出しました。

万吉は、旅の途中に宿泊した宿屋の主人から、多くの道が集まって人通りが多い御殿場（静岡県）での営業をすす



められました。

「これは、軽くて使いやすいな。値段もいい。二つもらうか。」  
「ありがとうございます。また、よろしゅうお願いします。」  
万吉は御殿場で、持ってきた日野碗をすべて売ることができました。

日野と御殿場を往復する行商を始めて三年がたったころ、富士山が大噴火を起こしました。噴火の勢いはすさまじく、関東一円に降り注ぐ火山灰は、農作物に深刻な被害を与えました。

富士山のふもとの御殿場は大きな被害にあい、品物が全く売れない日々が続きました。

「えらいことになってしもた。」

万吉は、行商の途中でお金がなくなり、食べることも、先に進むこともできなくなっていました。



日野碗

「もうあかん。お母さん、すんません。」  
そうつぶやくと、その場にたおれ込んでしまいました。薄れてゆく意識の中で、旅立ちの日の母の顔が浮かびました。

しばらくして、万吉は、誰かが自分に声をかけていることに気がつきました。

「あれ、あなたは日野のお碗売りさんではありませんか。しっかりしてください。噴火のせいで、たいした物はありませんが、どうぞ家の中にお入りください。」

と、通りかかった村の人が声をかけてくれたのです。そして、ぐったりしていた万吉に、温かく煮た大根をよそってくれました。

「おおきに。おおきに。」

万吉は、おがむようにして大根を口に入れました。大根の  
とろけそうな甘みが、口いっぱいになりました。

「いやいや。おれを言うのは私たちの方だ。あなたのお椀は軽  
くて使いやすいんで、家族みんなが大事に使っているんだよ。」  
話を聞きながら、万吉は左手のお椀を見つめました。

（これまで私は、自分の力で商売がうまくいったと思っていた。  
本当はそうやない。私はこの土地の人に生かされてたんや。）  
万吉は、大きな間違いに気づいたのでした。



何年かたって、被害を受けた  
村々にも、もとの生活がもどつて  
きました。それからというもの、  
万吉は、これまで以上に質の良い  
商品を用意して、遠くの村まで出  
かけるようになりました。

「おっ。今日もいい物がそろつて  
るね。一つもらおうよ。」

「はい。ありがとうございます。」  
「なんてきれいなお椀なんだ。しかも安いじゃないか。」  
「よかつたら、少し見ていってくださいいな。」

良い品物を安く売る万吉の評判はしだいに広まり、行商  
を始めて十四年後の三十四歳の  
時、御殿場に日野屋という店を  
開きました。

「お砂糖はないのかね。」  
「紙どろうそくがほしいんだが。」  
「娘の晴れ着を作るんで、良い  
生地をさがしているんだ。」  
こうした、お店にない商品を欲  
しがるお客さんもありました。



御殿場では不足する品物が多かったのです。万吉は、地元  
の人の困った様子を見ると、放っておけません。

「しばらくお時間をいただけませんか。」  
そう言うと、京都や大阪まで出かけて、質の良い品物を探  
し、注文した人に届けました。

「こんな品物がよく手に入ったね。助かるよ。」  
感謝の声に、万吉の顔もほころびます。こうして日野屋は、  
食料品、衣料品、日用品、人形など、幅広い商品を扱うよ  
うになり、御殿場の人たちの暮らしを、豊かにしていまし  
た。

万吉は後に兵右衛門と名乗りました。六十歳を迎えるこ  
ろ、生まれ育った日野の家を買いもどし、店を息子である  
二代目兵右衛門にゆずりました。二代目兵右衛門は、万吉  
の教えを守って、地域の人に喜ばれる商売を心がけ、日野  
屋はますます繁盛しました。二代目兵右衛門が残した家訓  
には、次のような内容が書かれています。

- ・店の商品は、確かで良い物だけを仕入れて販売すること。
- ・高い利益を望んではならない。
- ・お客様に対しては、誠実第一を心がけること。
- ・少ししか買わないお客様こそ大切にすること。
- ・店の従業員を大切にすること。

こうして「売り手(商人)」、「買い手(お客)」、「世間(地域)」  
の三つの満足を心がけた万吉の思いは、長く受け継がれて  
いきました。

塗師・・・うるしをぬる職人。  
家訓・・・守るべきものとしてその家に伝わる教え。

(1) 主題名 よりよい社会の実現 <C 勤労, 公共の精神>

(2) 本時のねらい

売り手の利益だけでなく、買い手の満足や地域全体の発展を考えた近江商人の生き方を手がかりに、社会をよくするために働くことの充実感や意義を考え、よりよい社会をつくるために役立ちとうとする態度を養う。

(3) 本時の展開 (例)

	学習活動・主な発問	予想される児童の思い	教師の支援 ○評価
導入	1. 近江商人について知る。 2. 『受け継がれる思い～山中万吉～』を読み話し合う。 ○母親に一礼する万吉は、どんな思いでいるでしょう。	・滋賀県にはすごい商人がいた。 ・近江商人の特徴は何だろう。 ・近江商人が遠くの地で商売を成功させた秘訣は何なのだろう。 ・何としても元気にもどります。 ・この日野椋を元手に絶対成功してやるぞ。 ・必ずや、家族のために家を買いたいと思わせる。 ・商売がうまくいったのは自分の力だと思っていたけど、買ってくれたお客さんのおかげだ。 ・自分は、御殿場の人たちに支えられて商売をさせてもらっていた。 ・人に喜ばれる商売をしたい。 ・御殿場の人の役に立ちたい。 ・この土地で商売させてもらっている恩返しをしたい。 ・自分の店の商品で、御殿場の町の人たちを幸せにしたい。	・関心をもって資料を読むことができるように、近江商人について簡単に紹介する。 ・行商へと旅立つ万吉の思いに寄り添えるよう、行商姿の日野商人の写真を掲示する。 ・ワークシートを準備して、売り手中心の立場から、買い手や地域の人々立場へと視野を開けた万吉の成長を考えさせる。 ・日本地図を見せ、富士山のふもとから京都や大阪まで歩いて行って良い商品を探す苦労を想起させ、御殿場の人を大切にする万吉の強い思いを考えさせる。 ・身近に考えられるよう、ワークシートを用意する。 ・行為の裏にある思いをグループで聞き合う。 ○社会のために役に立ちとうとする思いを強くしているか。(発言、ワークシートへの記述) ・教師の体験談を思い出の品や写真等をもとに紹介する。
展開後	3. よりよい社会にするために自分ができることを考える。 ○社会を良くする「私のミニチャレンジ」を考えよう。		
終末	4. 教師の話を聞く。		

(4) 評価

よりよい社会をつくるために、役立ちたいという思いがもてたか。

(5) 板書計画 (例)

よりよい社会のために




近江商人

世間よし (地域)

○京都や大阪で質のよい品物を探す万吉

買い手よし (お客)

○「大きなく違ひ」に気づく万吉

売り手よし (商人)

○母の姿に一礼して行商に向かう万吉

◇社会を良くする「私のミニチャレンジ」

出典

- ・『近江日野商人の研究 一山中兵右衛門家の経営と事業一』松元宏編
- ・『近江日野の歴史』第7巻日野商人編、日野町史編さん委員会編
- ・『近江日野町志』巻中 日野町教育会編
- ・『ふるさと日野の歴史』滋賀県日野町編
- ・『幕末期近江商人の家政改革 一山中兵右衛門家の場合一』末永國紀著

「受け継がれる思い〜山手万福〜」

名詞 ( )

○万福が返つた「大切に大切に」のせい。



○社名を取った「森の川」のせい。

ためし

しだい。

【理由】

○今日の新聞をよみました。

① 新しい新聞がありましたか。      したか ( )      ちよ ( )      新聞新聞 ( )      新聞 ( )

② 友達の新聞が参加になりましたか。      したか ( )      ちよ ( )      新聞新聞 ( )      新聞 ( )

③ 自分の新聞として読まれましたか。      したか ( )      ちよ ( )      新聞新聞 ( )      新聞 ( )

④ 今日の新聞は、新聞をたじろはりましたか。



羽化してすぐのアキアカネ  
(水口子どもの森提供)

ボのことを聞いてみることにしました。

浩太さんは、博物館の質問コーナーに行きました。

「こんにちは。夏休みに比良山で、見たことがないトンボが飛んでいるのを見つけました。調べてもわからないので、教えてください。」

「こんにちは。それはどんなトンボでしたか？」  
博物館の方は、図鑑を広げながら聞きました。

「このトンボです。何というトンボですか。」  
「これは、アキアカネですね。このトンボは、すずしいところが好きなので、夏には高い山の上において、秋になると、山から下りてくるのです。その中で、真っ赤に色

が変わるのです。みなさんが『アカトンボ』と呼んでいるトンボは、だいたいこのトンボのことですよ。」

「え、……これがアカトンボ？全然赤くないのに……。」

「おもしろいでしょう。実は、このトンボは、みなさんの学校の運動場にも来ることもありますよ。七月の初めごろ、アキアカネが山に登る前に、やってくるのです。二、三日でいなくなり、秋になるともどってきます。」

「それまでは、どこにいるのですか。」

「水の中です。トンボは幼虫のあいだ、水の中ですごくします。『ヤゴ』といいます。大きくなると水から出て、羽化してトンボになるのです。」

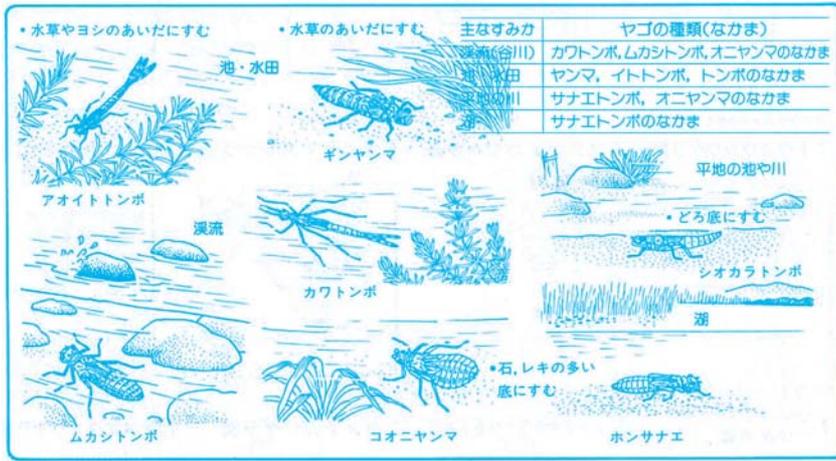
浩太さんは、ますますトンボに興味が出てきました。

「博物館には、めずらしいトンボがたくさん展示されていますね。見つけることができるトンボはいますか。」

「よく探すと、たくさんいますよ。実は、滋賀県は『トンボの宝庫』なんです。日本には二〇〇種類のトンボがいるといわれていますが、滋賀県では、実に一〇〇種類が確認されています。」

「滋賀県には、どうしてそんなにたくさんいるのですか。」

「ヤゴが水の中にすんでいるという話はしましたね。トンボの種類によって、ヤゴの時期に過ごす水環境がちがうのです。例えば、シオカラトンボのヤゴは田んぼにいます。イトトンボは水路や川で、メガネサナエやオオサカナエは湖岸で、アオヤンマはヨシ原でヤゴが育ちま



ヤゴのすみ場所 (滋賀県理科教材研究委員会提供)

す。こうして見ると、滋賀県には、いろんなタイプの水辺があるということになりますね。」

「なるほど。ということは、一〇〇種類の水辺があるというのですか。滋賀県って、すごいなあ。」

「それくらいたくさんさんの水辺があるということですね。湖や池、川などに限らず、ちょっとした水たまりなども、トンボの大切なすみかになっているのですよ。」

浩太さんはドキッとしました。浩太さんの家の周りでは、最近田んぼが減り、家が少しずつ増えていきます。家の近く

で、そのような場所を見た覚えがありません。

「ぼくの家の近くでは、ヤゴがすめる水辺が少なくなっているように思えます。最近、トンボの数が減っている、ということはありませんか。」

「そうですね、市街地では減っているのは確かですが、では、浩太さんは、

ふだん、あまりトンボを見ませんか。」

「ううん、そうだな……。シオカラトンボ、ギンヤンマ、アキアカネ、ハグロトンボ、イトトンボなどをよく見ます。ときどき、オニヤンマも。」

「きっと、イトトンボと言っている中にも、何種類かいるかもしれません。それだけいけば、ヤゴが過ごせる水辺はある、ということですね。でも、それは、多くの人々によって、水辺を守るための取り組みがなされているからなのです。例えば、湿原とよばれるところでは、そこで見られないトンボがいます。その土地を守るために、説明会や観察会を開いている地域などがありますよ。」

「そうなんですか。ぼくの住んでいる所でも活動しているかもしれませんね。今日は、いろいろなことを教えてください。本当にありがとうございます。」

浩太さんは、小さな水辺を見つけるたびに、何度も立ち止まりながら帰っていききました。



- (1) 主題名 豊かな自然を守る (D 自然愛護)  
 (2) 本時のねらい  
 自然の多様性を知り、滋賀の自然を大切にしていこうとする心情を育てる。

(3) 本時の展開 (例)

	学習活動と主な発問	予想される児童の思い	教師の支援 (評価)
導入	1. アキアカネの赤くなる前の写真を見せる。 「これは何というトンボでしょうか。」 2. 『生き物の宝庫 滋賀県』を読んで話し合う。	・見たことはありそうだけれど、わからない。 ・アカトンボの体の色が変わるなんて、知らない。 ・アカトンボが、あんな山の上にいるなんて。 ・もつとトンボのことを知りたいたいな。 ・滋賀にはたくさんトンボがいて、すごいな。	教師の支援 (評価) ・この後の話に出てくることを伝え、資料への方向付けをする。
展開	○博物館の方の話を聞いて、トンボへの興味がわいてきたときの浩太さんは、どんなことを考えていただろう。	・アカトンボの体の色が変わった。 ・アカトンボが、あんな山の上にいるなんて。 ・もつとトンボのことを知りたいたいな。 ・滋賀にはたくさんトンボがいて、すごいな。	・トンボの生態にふれることで生き物の多様な生き方に感動させたい。
展開	○滋賀県に100種類ものトンボがいることを知ったとき、浩太さんはどんな思いになっただろう。	・滋賀にはたくさん水辺があつてすてきな。 ・滋賀県ってすごいな。 ・トンボが減っているかと心配したけれど、安心した。	・「トンボのこと」や「水辺のこと」などに分けて板書すること、滋賀の自然の豊かさを感取れるようにする。
前段	◎博物館からの帰り道、浩太さんは水辺を見ながらどのようなことを考えていただろう。	・環境を守ろうという方々がいるのはうれしいな。 ・環境を守る取組について詳しく調べてみたい。	・ペアやグループで話し合い、環境保全の取り組みをうれしく思う気持ちや、自分自身でできることから実行していき、いろいろな考えが出るようにする。
後段		・自分も環境を守る取組に参加してみたい。 ・環境を守るために、自分にできることはなにか。	(滋賀の自然の豊かさを知り、自然を守ることの大切さに気が付くことができたか。)

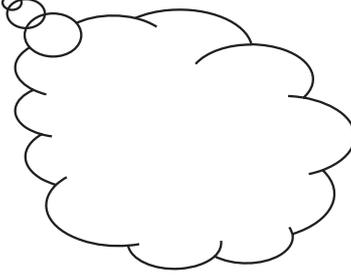
展開	3. 自分の身の回りの自然を振り返る。 ○滋賀の自然の豊かさや素晴らしいと感じたことがありますか。また、自然が減ってきたと感じたことはありませんか。	・びわ湖でたくさん泳いだ。 ・家の周りの川には、たくさん魚がいる。 ・小さいときに比べて、ホタルが減っている。	・やまのこやフロテイングスクールなどの体験を想起するよう促す。 ・感動体験だけでなく、心配していることも出し合うことにより、自然を守ろうという意識につなげるようにする。
終末	4. 教師の説話をする。		・県内の水辺を守るために、活動されている方々のことについて伝える。

(4) 評価

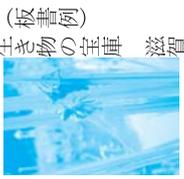
滋賀の自然の豊かさを知り、自然を守ることの大切さに気が付くことができたか。

(5) 板書計画

豊かな自然を守る



○ 滋賀県のすばらしい自然



○ 博物館の方のお話を聞いたとき

○ 博物館からの帰り道

○ 滋賀に百種類のトンボがいることを知ったとき (トンボのこと)

(板書例)

生き物の宝庫 滋賀県

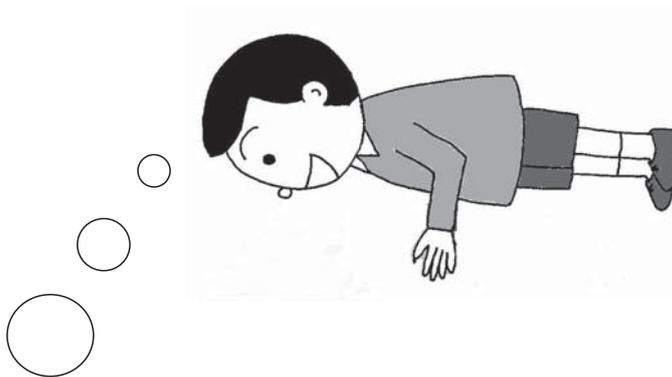
※説話例

「山間部の湿地」では地元の方や保全団体、滋賀県などが協力し合って保全活動が行われ、ハッチョウトンボをはじめ、ユリやその他の動植物を守る活動もされています。湿地だけでなく、田園空間博物館というエリアが各地につくられたり、人が水辺を荒らしてしまわないように、登山道を設けたりするなど、いろいろな方が滋賀県の素晴らしい自然や生物を保全する活動されています。そのおかげで、滋賀県は、様々な水辺が保たれ、トンボだけでなく、様々な生物にとつて、とてもすみやすい環境が保たれています。

# 生き物の宝庫 滋賀県

名前 ( )

○博物館からの帰り道、浩太さんはどんなことを考えていましたか。




○今日の学習をふりかえって

- ①新しい発見がありましたか。 とても ( ) よく ( ) まあまあ ( ) あまり ( )
- ②友達の話が参考になりましたか。 とても ( ) よく ( ) まあまあ ( ) あまり ( )
- ③自分の問題として考えられましたか。 とても ( ) よく ( ) まあまあ ( ) あまり ( )
- ④今日の学習で一番考えたことはなんですか。

--

# 施設マップ



施設	住所	電話番号	施設	住所	電話番号
○中江藤樹関係			○近江商人関係		
①	近江聖人中江藤樹記念館 高島市安曇川町上小川69番地	0740-32-0330	⑦	近江商人博物館 東近江市五個荘竜田町583	0748-48-7101
②	高島市良知館 高島市安曇川町上小川225番地1	0740-32-4156	⑧	五個荘近江商人屋敷藤井彦四郎邸 東近江市宮荘町681	0748-48-2602
③	藤樹書院 高島市安曇川町上小川211番地 <small>(高島市文化財課)</small>	0740-32-4467	⑨	五個荘近江商人屋敷外村宇兵衛 邸 東近江市五個荘金堂町645	0748-48-5557
○糸賀一雄関係			⑩	五個荘近江商人屋敷外村繁 邸 東近江市五個荘金堂町631	0748-48-5676
④	滋賀県健康医療福祉部障害福祉課 大津市京町四丁目1番1号	077-528-3541	⑪	五個荘近江商人屋敷中江準五郎 邸 東近江市五個荘金堂町643	0748-48-3399
○雨森芳洲関係			⑫	近江八幡市立郷土資料館 近江八幡市新町二丁目22	0748-32-7048
⑤	東アジア交流ハウス雨森芳洲庵 長浜市高月町雨森1166	0749-85-5095	⑬	愛荘町立郷土の偉人館西澤眞蔵記念館 愛知郡愛荘町野々目72-3	0749-42-7233
⑥	高月観音の里歴史民俗資料館 長浜市高月町渡岸寺229	0749-85-2273	⑭	近江日野商人館 蒲生郡日野町大窪1011	0748-52-0007
			○環境関係		
			⑮	琵琶湖博物館 草津市下物町1091	077-568-4811
			⑯	みなくち子どもの森 甲賀市水口町北内貴10番地	0748-63-6712

滋賀県道徳教材

「近江の心」(小学校版)

平成 29 年 3 月発行

発行：滋賀県教育委員会  
〒520-8577  
大津市京町四丁目 1 - 1